

あさが来た

江越 航(科学館学芸員)

昨年秋より放送中の朝のドラマ「あさが来た」。明治の女性実業家・広岡浅子を描いた物語で、科学館の最寄り駅・肥後橋の辺りが舞台の中心ということもあり、近所で展開していた話だと思うとさらに身近に感じます。

もっとも、物語自体は天文学とは関係ないものですが、気になるシーンがありましたのでご紹介しましょう。

月そく皆既

ある日の放送で、主人公あさが暦を見ているシーンがありました。この暦に、「月そく皆既」という文字が書いてありました。「そく」とは「食」、つまり皆既月食のことですね。

写真1は科学館所蔵の明治6年の暦で、実際に放映されたものと同じページです。一瞬しか写りませんでしたでしたが、ドラマでもこの通り、忠実に再現されていました。

暦に記載されている明治6年9月15日、実際に月食がありました。なお、このこよみは天保暦(いわゆる旧暦)として作成されたものですので、新暦だと11月4日になります。天保暦は月の満ち欠けを基準とした暦であり、新月が1日、満月はだいたい15日頃ということになります。ですから、旧暦では日食は必ず1日、月食は15日頃に起きる事になります。

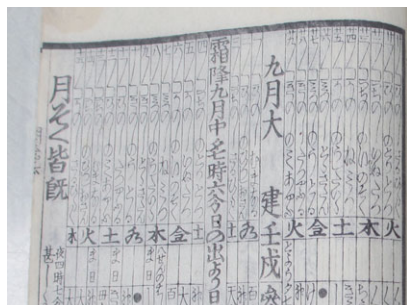


写真1 月そく皆既

明治6年改暦

ところで、この暦は明治6年のものです。日本では、明治5年(1872)12月3日をもって、明治6年(1873)1月1日として、1年が365日である現在の太陽暦に改暦されました。

ですから明治6年の旧暦は、本来なら存在しないはずの暦ですが、この改暦が急に行われたため、旧暦の暦が既に作られていたのです。実際、新政府が改暦の通達を出したのは、明治5年11月9日のことであり、施行までわずか23日という突然の改暦でした。



写真2 明治6年暦の表紙

この改暦の有名な話として、明治政府の財政事情があります。物語中でも、新政府が上納金を要請するシーンがありましたが、明治新政府は厳しい財政状況にありました。そんな中、明治6年は旧暦だと閏6月があるので、全部で13ヶ月ある年でした。すると、給料を13ヶ月分払う必要があります。財政難の新政府には、頭の痛い話でした。

しかし、現在使われている新暦なら、一年は12ヶ月ですので、給料も12ヶ月分で済むことになります。さらにこのタイミングで改暦すれば、12月は2日しかなくなることになります。2日しか働いていないのだから12月分の給料は払わなくていいだろう、ということにして、急遽改暦を行って、2ヶ月分の給料の支払いを節約したということなのです。

ゆかりの地

肥後橋を中心に展開していた物語ということで、科学館の近くにもドラマに関係する場所がたくさんあります。科学館に来る機会に、近所にあるゆかりの地も巡ってみてはいかがでしょうか。



写真3 大同生命ビル
加島屋(ドラマでは加野屋)があったところ。肥後橋駅すぐ。



写真4 天五に平五・十兵衛横町
姉の春が嫁いだ天王寺屋があった
辺り。北浜・開平小学校前。



写真5 五代友厚像
大阪の経済発展に貢献した薩摩藩士。
北浜の大阪証券取引所前。



写真6 福澤諭吉誕生地
中津藩蔵屋敷で生まれ、北浜にある
適塾にも通った。ほたるまち前。